

金融とのかかわりを知ろう

—間接金融・直接金融—

横浜市立潮田中学校 力丸 剛

金融（間接金融）とは…

教科書「中学生の公民 初訂版」（以下、教科書）p.54では、金融についてお金の余っている家計や企業から、お金の足りない家計や企業にお金を融通すること、その際お金を橋渡しする金融機関（銀行、信用金庫など）は、融資先から受け取る利子と預金者に支払う利子の金額の差で利益を得るという基本的な仕組みや働きについて図①（上図）などをも使い記述している。



①金融のはたらき

次に、金融の定義として、以下の内容について考えてみたい。

一般購買力を時間的、地理的制約を越えて、他者に移転（貸し出し・出資）あるいは留保（売掛・買掛）することでリスクを引き受けるとともに、収益（金利）を得る一方、便益（資金移転や支払い猶予）を得る側はコスト（金利）を支払う行為。《2008金融経済教育フォーラム in 広島（証券知識普及プロジェクト主催）での千葉商科大学名誉教授 斎藤精一郎氏のレジュメより》

ここで注目したいのが、金融が“リスクを引き受ける”という記述である。そこには、お金の余っている家計や企業から預かった大切なお金を、お金を借りたいという家計や企

業に、金融機関の責任で支出計画を十分審査し、リスク（ここでは、「貸したお金が返ってこないかもしれないということ」とすると生徒はわかりやすい）などをも考慮して、間接的に融資していくという間接金融の姿が見えてくる。

2 リスクと信用から金融を考える

まず、予備知識なしに銀行のロールプレイングにトライしてみよう。登場人物は、3人である。預金者、融資を受ける者、そして、**銀行員**である。さて、ロールプレイングを通して、その役割を十分こなせないのは、間違いなく銀行員の役を任された生徒であろう。ここから、間接金融の仕組みや働きを理解させるには銀行員の仕事の中身を知ることが必要不可欠なことがわかる。そこで、「銀行員になって融資をしてみよう！」というアクティビティを行うことによって、銀行員の仕事「銀行の預金は、預金者から一時的に預かった大切なお金なので、貸したお金を返してもらえないと大変なことになります。そのため、

使い道や無理なく返せるかをよく考えてお金を貸します。」ということが見えてくる。

みずほ銀行との協同授業

「銀行員になって融資をしてみよう！」（「東京学芸大学・みずほFG金融教育共同研究プロジェクト」から）

- * () 先生（結婚資金329万円）
- * コンビニを開く友だち（開店資金1000万円）
- * ちょっと売れなくなった芸能人Aさん（生活費にする3万円）
- * ドラマや映画で主演をはっている芸能人Bさん（家を買う5000万円）

それぞれが、銀行にお金を貸してほしいと申し入れています。預金者から大切なお金を預かっている銀行員になって、①貸すか、貸さないか ②貸すとして、金利を高くするか、低くするか。その場合、現在の一番有利な金利の預金（定期預金）でも、金利は0.6%ということ踏まえ、貸出金利を決めましょう（上限は、授業で決めます）。③その理由を簡単に書きましょう。

融資先	()先生	コンビニ店長	Aさん	Bさん
貸す(○) 貸さない(X)				
金利	%	%	%	%
理由				

このアクティビティは、銀行側から貸し出しにおけるリスクと金利の関係を考えながら、金融の仕組みや働きを考えようというものである。授業は、みずほ銀行の協力をいただき、1か月以上にわたり相互に指導案を検討したうえで実施した。

授業のねらい

○銀行を中心としたお金の流れを理解し、それを活用し経済活動における銀行（金融）の果たす役割について考え、課題に答えることができる。

観点別の評価

- ・金融機関で働く講師の話を通して、金融に興味関心を持つとする。（関心・意欲・態度）
- ・「なぜ金融機関があるのか。」「金融機関にはどのような役割があるのか。」ということについて、自分の考えをまとめ表現している。

（思考・判断・表現）

- ・アクティビティの内容をワークシートに的確に記入している。（技能）
- ・ビデオと黒板の小物を通して、銀行を中心

としたお金の流れを身につけている。

（知識・理解）

アクティビティの実施後、まとめとして銀行の方から次のような解説をしてもらった。

- お金を貸し出す際には、銀行員は融資先の「信用」を判断する。具体的には、
- ①借りる目的がはっきりしているか。たとえば、しっかりした目標を持っているか。
 - ②お金を返すことのできる収入や財産があるか。
 - ③お金を返す約束を守れるか。守っているか。
- 借りたものを返すという当たり前のことができるか。

まさに、リスクと信用から金融を考えるユニークな授業実践となった。

さらに、経済活動における銀行（金融）の果たす役割について考えさせるために、次の課題に取り組んだ。

次の話を読んで自分の考えを書きなさい。

この国では、お金の貸し借りをすることは犯罪です。ほしいもの（住宅などとくに高額なもの）ややりたい仕事（自分で会社を起こ

すなど)があるときは、お金が貯まってから買ったり、始めたりします。みんながすごく真面目に働いて生きているこの国は、あまり豊かではありません。

この国をもう少し豊かにする解決策を2つ考え、またその理由を書いてください。

1.

2.

その理由

“貯蓄のパラドクス”なども取り入れたこの課題について考えることで、新学習指導要領に取り上げられている、

①家計の貯蓄などが、企業の生産活動や人々の生活の資金などとして円滑に循環するために、経済活動における金融の果たす役割を理解させる。さらに、

②「今お金があれば、大きなチャンスをつかむことができるかもしれません。しかしお金が貯まってからでは大きなチャンスを失うかもしれません(機会損失)」ということについても考えさせる。この2点から金融の仕組みや働きの本質に迫ることをねらいとした。

3 「株式(直接金融)って何？」

たとえば、教科書では…

「株式会社は、株式とよばれる証書を発行して資金を集めます。(中略)株式を発行することにより、一人ひとりから集めるお金は少額でも、多くの人から集めるため、全体としては多額の資金を得ることができます。」(教科書p.52~53) さて、このような教科書の記述、または教師の一般的な説明で、生徒は本当に株式というものを、理解できるので

あろうか。実は「なんとなくわかった。」というレベルではないだろうか。

では、次の方法では、どうだろう？



オランダ東インド会社

アムステルダムの中心に近い運河のほとりにオランダ東インド会社の本部であった建物が今も残されている。ヨーロッパ中世では、まずイタリアの商人が、続いて西欧の諸国とりわけオランダがアジア貿易に力を入れていく(その結果、鎖国の日本にも食い込み、あの長崎貿易にこぎつける)。しかし、ハイリスク(貿易船自体が帰って来るかどうかもわからない)ハイリターン(貿易船が帰ってくれば儲けは大きい)という壁を克服し、航海のための資金を集める方法をどうやって考え出したのか。

解答 お金を借りるのではなく、船の所有権を分割して売り出す株式という仕組みを考えて、直接お金を集めた。

貿易船が無事に帰ってきたら、船長に報酬、乗組員に給料を払うなどした後、残りの利益は株主が株数によって受け取る。しかし、途中で沈んでしまえば、株式は何の価値もなくなってしまうというものである。この仕組みを整理し、現在の株式会社と比べてみると、

- ①株主には貿易船の所有権がある。-株主には、会社の所有に関する権利がある。
- ②株主は利益の配分を受け取る。-株主には、配当を受ける権利がある。
- ③株主は貿易船の支配者である。誰を船長に

するか、どこに行くかなどを決定する。－株主には、**株主総会における議決権がある**。

④貿易船が沈んでしまったら、持っている株式は無価値になる。－会社が倒産したら出したお金は戻らない（**有限責任**）。

オランダ人たちが目を輝かせて、貿易船にお金を直接投資している姿が浮んでくるだろうか（『高校生のための株式投資入門』ソフトマジック 足羽 恵氏著を参考にした）。このように地理的・歴史的な視点をも活用して、まず株式・株式会社という仕組みを立ち上げた状況に戻って焦点化し、さらに、現在の仕組みや働きと比較させることで、「目から鱗！」である。教科書を何度読んでもピンとこなかった生徒が、**なぜ株式・株式会社の仕組みが生まれたのか、この仕組みがいかに画期的な発明であったのか、どうして現在でも継承され、どのような役割を果たしているかが理解できるようになる**。まさに、教科書 p.52～53の記述が、オランダの貿易船を通して見えてきて、直接金融の基本的な仕組みや働きに迫っていくことを可能とするのである。

4 終わりに

金融についてこんな話を取り上げたい。

町で「必ずもうかる金融商品があるんだけど！」と言われたら、どうする？ 答えは、

1. それなら、まず自分でやってみたら
2. みんなが知ったら、儲け話じゃない

実は2の答えを言える人は、ものすごく経済的な見方をしている人である。なぜなら、ハイリターン・ローリスクの金融商品があることがわかれば、多くの人がその商品を購入し、その結果値上がりし、必ずローリターン・ローリスクになる。という法則に気づいてい

るからである（ただし、1の場合には、逆選択という見方もある）。また、こういった話によく取り上げられる株式は、ハイリターン・ハイリスクの代表的な金融商品であるが、多数の売り手と買い手が市場に存在し（需要と供給の関係が成立）、情報が公開されている現状では、市場のリターンを上回るような超過リターンがあるようない話はないことに気づくはずである。

このように、金融の基本にかかわる見方・考え方がわかればお金の魔力に振りまわされることはなくなるかもしれない。それには、さらに、今回とくに取り上げたリスクなどを金融リテラシーとして、自分の中にしっかり位置づけ、消費力を高めることも必要である。そして、支援者としての教師は、網羅的に知識を扱うのではなく、仕組みや働きを骨太に理解させ、金融経済をぶれることのない眼で見るため、考えるための基本的な概念や法則を身につけさせる授業の実践が求められているのであり、このことが、新学習指導要領で新たに設けられた「現代社会についての見方や考え方の基礎を培う基本的な概念を身につけ、その枠組みに即して解釈し社会生活に与える影響および意義を自ら見出そうとする力を育てる」ことにつながっていくのである。

最後に、投資を考える際の良書といわれる『ウォール街のランダム・ウォーカー』という本の著者バートン・マルキールは、「成功する投資家というのは、非常にバランスのとれた人格の持ち主で、自然な好奇心と…」と述べている。アイデンティティ確立に動き出した中学生に対する金融経済教育は、人間としての成長に深くかかわりながら慎重に実践されなければならない。